

# SHOW HEYシネマルーム

★★★★★

## 黄色い星の子供たち

2010年・フランス、ドイツ、ハンガリー映画  
配給/アルバトロス・フィルム  
125分

2011(平成23)年6月10日鑑賞

GAGA試写室

Data

監督・脚本：ローズ・ボッシュ  
出演：メラニー・ロラン/ジャン・レノ/ガド・エルマレ/ラフ・アエル・アゴゲ/ユーゴ・ルヴェルデ/オリヴィエ・シヴィノ/マチュー&ロマン・ディ・コンチエート/レベック・カ・マルデル/アンヌ・ブルシェ/イザベル・ゲリナス/ティエリー・フレモン/カトリーヌ・アレグレ/シルヴェー・テスチュー

### 👁️👁️ みどころ

フランスは「自由と人権の国」だが、1940年当時ヴィシー政権はナチス・ヒトラーに対していかなる対応を？邦題の「黄色い星」とはナニ？ヴェル・ディブ事件とはナニ？日本人は、まずそこから勉強しなければ・・・。

『ライフ・イズ・ビューティフル』（97年）や『聖なる嘘つき その名はジェイコブ』（99年）は作りモノの映画として涙を誘ったが、本作はあくまで史実にもとづくストーリー。したがってユーモア感はないが、こんな迫害にもかかわらず、パリ在住の2万4000人のユダヤ人のうち1万人が生き残ったことを、キリシタン迫害の歴史と対比しながらしっかり考えてみたい。

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

### ■□ポーランド、イタリア等に続いてフランスでも・・・■□

ナチス・ヒトラーによるユダヤ人迫害を描いた名作は多いが、私が強く印象に残っているのが、①ユダヤ系イタリア人たちの「悲しい嘘」をテーマとして描いた『ライフ・イズ・ビューティフル』（97年）（『シネマルーム1』48頁参照）、②ポーランドにあるゲットーを舞台とし「情報」をテーマとして描いた『聖なる嘘つき その名はジェイコブ』（99年）（『シネマルーム1』50頁参照）、③オランダにおけるナチス・ドイツに対するレジスタンス活動を描いた『ブラックブック』（06年）（『シネマルーム14』140頁参照）などだ。

1940年6月の侵攻によってオランダと同じようにナチス・ドイツに占領されたフランスでは、ポール・レノー首相ら抗戦派に変わって、1940年6月には和平派であったペタン元帥が首相となり、7月1日には首都をヴィシーに移転した。本作にもあくまでナ

チス・ドイツに抵抗するシャルル・ド・ゴール將軍率いる「自由フランス」で活動する人物が登場するが、ペタンを首相とする新政権はあくまでナチス・ドイツとの協調を目指すものだったため、ヒトラーが押し進めるユダヤ人狩りにも協力することに。そんな時代状況の中、本作が描くヴェル・ディブ事件が起きたわけだが、さてその全貌とは？

## ■□■ヴェル・ディブ事件とは？やっぱり映画は勉強！■□■

日本では1964年の東京オリンピックに向けて、国立代々木競技場などの立派な施設が次々と建設されたが、先進的な資本主義国であったフランスでは、1942年当時既にヴェル・ディブという立派な冬季競輪場が建設されていた。1942年当時パリに住むユダヤ人は2万4000人。多くのユダヤ人がフランスに住み着いたのは、人権にシビアなフランスは「救いの国」だと信じていたからだ。

邦題のタイトルになっている「黄色い星」とそのマークを見て、その意味のわかる日本人は少ないはず。これは、1942年6月6日にヴィシー政権下のフランスで、6歳以上のすべてのユダヤ人に対して黄色の星を胸に取り付けるよう命令されたものだ。パリに住むユダヤ人に対しては、ホテルやカフェ、図書館などの公共施設に入る事を禁止するなどの規制がどんどん厳しくなっていたから、このように一見してユダヤ人であることがわかれば何かと便利。「黄色い星」とはそういう政策の表れだが、そこに至るまでには既にさまざまなユダヤ人に対する規制が実施され、二度にわたる大規模な検挙もなされていた。

本作が描く、ある意味で人権の国フランスの「恥部」とも言える「ヴェル・ディブ事件」とは、1942年7月16日、17日に起きたユダヤ人の一斉検挙事件のことだが、歴史には詳しいと自負している私も実はこの歴史的事実を知らなかった。スクリーンに登場するヴェル・ディブは巨大な建造物で、さすが先進資本主義国フランスと感心させられるが、そこに収容されたユダヤ人は約8000人。彼らはなぜこのヴェル・ディブに収容されたの？そして、この後に彼らを待ち受けている運命とは？

## ■□■いつの時代も、消防士は英雄？■□■

3. 11東日本大震災への菅直人政権をはじめとする政治の対応は最低だが、世界から絶賛されたのが、パニックになっても不思議ではないあの状況下における被災者たちの我慢強さ。私に言わせればそれは同時に短所でもあるのだが、黙って並んで配給を待ち、1個のおにぎりを家族で分けて食べる風景が世界から絶賛されたのは当然。3. 11東日本大震災は、①地震、②津波、③原発被害の「三重苦」が特徴だが、水素爆発した福島第一原発3号機の使用済み核燃料プールへの放水のメドがたったのは、自衛隊や警視庁に続く3月19日の東京消防庁のハイパーレスキュー隊による放水からだ。これによって、彼ら消防士たちは一躍日本国の英雄となった。

それは、2001年の9. 11アメリカ同時多発テロも同じで、現場にいち早く駆けつ

けた消防士たちは華々しい活躍をみせた。もともとそのうちの343名は殉職したとのことで、そのことは、『ニューヨークの英雄たち／9・11の消防士たち』（近代消防社）で詳しく語られている。しかして本作では、ホースの点検のためにヴェル・ディブにやってきた消防団の責任者が、何とも人道的かつ感動的な行動を示すのでそれに注目！そんな姿に思わず涙が・・・。



『黄色い星の子供たち』 発売／販売：アルバトロス 税込価格：3,990円  
LA RAFLE (c)2010 LEGENDE LEGENDE FILMS GAUMONT LEGENDE DES SIECLES TF1 FILMS PRODUCTION  
FRANCE 3 CINEMA SMTS KS2 CINEMA ALVA FILMS EOS ENTERTAINMENT EUROFILM BIS

## ■□■あの美人女優とあの名優が素晴らしい演技を！■□■

美人女優には目のない私の目に一目で焼きついたのが、クエンティン・タランティーノ監督の『イングロリアス・バスターズ』（09年）（『シネマルーム23』17頁参照）で見たフランス人女優のメラニー・ロラン。彼女は『オーケストラ！』（09年）（『シネマルーム24』210頁参照）でもいい味を見せていた。そんな美人女優が本作では、赤十字から派遣されてヴェル・ディブに入った看護師アネット役で素晴らしい演技を！

他方、ユダヤ人医師としてたった一人ヴェル・ディブ内で奮闘するダヴィッド・シェインバウム医師を演じるのが、『ニキータ』（90年）、『レオン』（94年）等のリュックベッソン監督作品で有名なジャン・レノ。劣悪な環境下にある8000人ものユダヤ人の健康を一人の医師と数人の看護師で支えることが無理なことは最初からわかっているが、彼は

黙々と自分の職務に従事。アネットはフランス人ながら、ヴェル・ディブからロワレ県にあるボーヌ収容所までシェインバウム医師らと共に移動したが、ユダヤ人であるシェインバウム医師にはさらなる移動先が。そして、苛酷な運命が・・・。

アネットはボーヌ収容所の劣悪な食糧事情に抗議すべくユダヤ人と同じ食事を続けたが、それによって彼女は3週間に8kgも痩せてしまったから大変。そんなアネットの努力によって、何とか収容所内の子供たちにはマドレーヌが、大人たちには十分な食事が運びこまれたが、所詮それは一時のこと。大人の男性たちと共に列車に乗り込まされたシェインバウム医師はその後スクリーン上に登場しなくなってしまうが、アネットは戦争が終了した1945年に再度登場し、涙を誘う感動の再会をいろいろと果たすから、最後までこの美人女優に注目！

## ■□■子供たちの反応は？■□■

大人はいつの時代でもそれぞれの立場や役割があるから、ナチス・ドイツによるユダヤ人への迫害が強まってきても、基本的にはその状況に乗ったうえで、いかなる対策をとるかという発想しかできない。そんなことが『ライフ・イズ・ビューティフル』を観ても、本作を観てもよくわかる。『ライフ・イズ・ビューティフル』では、5歳の息子ジョズエは、「これはゲームなんだ」という父親グイドの言葉を鵜呑みにしてその後ゲームに没頭したが、本作に登場するもう少し年上の子供たちは？本作の主人公はユダヤ人の父親シュメル・ヴァイスマン（ガド・エルマレ）と母親スラ・ヴァイスマン（ラファエル・アゴゲ）の息子ジョー・ヴァイスマン（ユーゴ・ルヴェルデ）。ジョーは仲良しのシモン・ジグレル（オリヴィエ・シヴィ）やシモンの幼い弟ノエ（マチュー&ロマン・ディ・コンチエート）たちと共に厳しい時代状況下でもたくましく生きていたが、年長者である長女は早くパリから脱出しようと大胆な提案。ところが、穏健な（？）父親シュメルはそれを却下。さて、その結果は？

本作では一斉検挙によってヴェル・ディブに収容されたユダヤ人たちが順次他の強制収容所に移送されていく姿が描かれるが、自分たちがどこに移送され、どのような処遇を受けるのかについて、ナチス・ドイツからの説明が全くないのは当然。少しずつ苛酷な状況に変わっていく中で一人一人が自分に迫っている運命を知ることになるのだが、やはりそこで行動を起こすのは大人ではなく子供。それが、本作の主人公であるジョーをみているとよくわかる。したがって本作では、ギリギリの局面下においてなお自分の力で生きようとすべくたくましい子供たちの姿に注目したい。

## ■□■やっぱり、フランスは「自由と人権の国」と感心！■□■

わが国では徳川幕府が1612年にキリシタン禁止令を出し、徹底的にキリシタンを弾圧したから、これによって日本におけるキリシタンは全滅？去る5月29日に見た指揮者

の佐渡裕が司会するTV番組『題名のない音楽会』では、箏の名曲「六段」がグレゴリオ聖歌「クレド」をベースにしてつくられたキリシタン音楽であるという皆川達夫先生の大胆な仮説をテーマとして取り上げていた。すなわち、箏の名曲にはすべて歌がついているのに「六段」には歌がないが、それこそキリシタン弾圧の中でキリシタン音楽を後世に伝えるためのテクニック！という仮説だ。そんな仮説は「クレド」と「六段」の両方を聴いているとなるほどと思えたが、さてその真相は？

私は2007年1月26日～28日の広島・宮島・山口旅行で、明治維新後のキリシタン禁止令によって、長崎浦上から津和野藩に送られて幽閉されたキリシタンたち弾圧の姿をじっくりと見学し、大きなショックを受けた。とりわけ「三尺牢」の印象は強烈だった。このように津和野では、水ぜめ、火あぶり等の拷問によって改宗を迫ったが、さて徹底的にユダヤ人を弾圧したフランスでは？

本作ではヴェル・ディブやポーヌの強制収容所におけるユダヤ人への虐待ぶりが描かれるが、他方で増えすぎたユダヤ人移民を撤廃しようとするペタン元帥や、警察の権威を認めてもらうのと引き換えに自分たちの手でユダヤ人検挙を行おうとするフランス警察の責任者たちの姿が描かれる。これを見ると一瞬、自由と人権の国フランスはインチキ、救いの国フランスもインチキとってしまうが、よくよく考えるとパリに居住する外国籍のユダヤ人は2万4000人もいたのに、ヴェル・ディブ事件で検挙されたのは1万3000人だから、1万人あまりのユダヤ人は検挙を免れ、戦後生き延びたことになる。これは日本におけるキリシタンの弾圧と比べると、なんともすごいことだが、これを実現させたのはまさに多くのフランス人達のヒューマニズムや良心のおかげだ。

ヴェル・ディブや強制収容所におけるアネット看護師の奮闘にも頭が下がるが、私がそれ以上にすごいと思ったのは、ナチス・ドイツによるユダヤ人狩りの圧力にもかかわらず、命懸けでユダヤ人の子供を養子にしたり、地下室や屋根裏部屋にかくまったフランス人がたくさんいたことだ。キリシタンを弾圧した日本ではキリシタンをかくまった日本人はほとんどいなかったことと対比すれば、まさに「自由と人権の国」フランスの面目躍如たるものがある。3.11東日本大震災の発生後もバカバカしい政局に明け暮れている日本と、いち早く原発廃止を国の方針として決定したドイツ、あるいはしょっちゅうデモばかりやっているフランスやイギリスに比べると、日本国の危うさは明らかだ。やっぱり、フランスは自由と人権の国と感心！

2011（平成23）年6月15日記